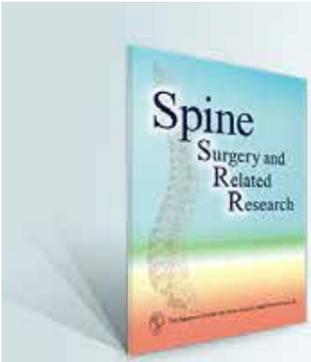


- <特集レポート> Journal Impact Factor (JIF) の取得にあたって (SSRR誌 編集委員長インタビュー)
- <杏林舎サービス紹介> 医学系学会向けeラーニングシステム KaLibEL (カリベル)



日本脊椎脊髄病学会【公式】  
オープンアクセスジャーナル

Spine Surgery and Related Research (SSRR)

インパクトファクター獲得記念  
編集責任者インタビュー

## Journal Impact Factorの取得にあたって

2023年6月、日本脊椎脊髄病学会 (JSSR) が発行する「Spine Surgery and Related Research (SSRR)」が、初めてのジャーナル・インパクトファクター (Journal Impact Factor ; JIF) の1.2を取得しました。ジャーナル創刊準備の段階より編集責任者を務める折田純久先生に、JIF取得までの道のりや今後の展望についてお話を伺いました。

Spine Surgery and Related Research (SSRR)は、日本脊椎脊髄病学会の公式オープンアクセスジャーナル(<http://ssrr-journal.jp/>)で、脊椎脊髄領域の医師および研究者を対象とした国際的なPeer Review ジャーナルです。脊椎脊髄に関連する解剖学、病態生理学、生体力学、診断学、治療法に関する基礎研究、臨床研究、トランスレーショナルリサーチの原著論文、システマティックレビューを含む総説論文、テクニカルノート、症例報告など多彩な論種を掲載しています。

### 1. JIFの取得

まずはJIFの取得おめでとうございます。2023年6月の取得以降、一気に投稿数が増えましたが、学会内での先生方の反応はいかがでしたか。

**【折田】** ありがとうございます。JIFを取

集委員会を行ってから現在まで非常に順調だったと思いますが、振り返って苦労された時期はありましたか。

**【折田】** やはり創刊したての頃ですね。JIFを既に持っている他の著名な海外ジャーナルに論文を投稿し掲載されている先生方に、JSSRの機関誌とはいえ創刊したてでJIFもないジャーナルに「是非、英語原著論文の投稿をしてください」とお願いをしなければならなかった時期は苦労しました。それだけでは論文はどうしても集まりませんから、編集委員の先生方やその関連施設の先生方にも直接お願いをして、何とか数を集めました。ちなみに、投稿第1号としては投稿システムの動作テストも兼ねて私が投稿しました

ったインパクトは随所で顕著に出ているようです。JIFを取ったことに対して称賛の声、「やりましたね」というのは、皆さんからおっしゃっていただけますね。

初めてのJIFが1.2ですが、先生方から見てこの数値はいかがですか。

**【折田】** 初回としては上々ではないかと思えます。事前の暫定値はもう少し高か

(笑)。なかなか投稿論文が集まらないのではないかと心配していましたが、我々の心配をよそに評議員の先生方も含めてJSSRの会員の先生方も含めて多くの方々が投稿してくださったので、その結束の強さに委員一同、安堵と感謝の気持ちでとてもありがたかったです。また創刊当時はEditor-in-Chiefが私の直属の上司である高橋和久先生(千葉大学名誉教授)でいらしゃったので、創刊するにあたって何からどのように進めて行くかというところは非常に相談しやすかったです。

創刊準備の段階から編集責任者を任命され、プレッシャーを感じられたのではないのでしょうか。

ったので、これからもっと上がっていくポテンシャルはあるのかなと思います。逆に創刊からSSRRの発展を陰で支えていただいた杏林舎スタッフの皆様にも伺いたいのですが、SSRRが創刊してから1年というスピードでEmerging Sources Citation Index (ESCI) に掲載され、比較的順調なペースで今回のJIF付与につながったと思いますが、これはどのような点が良かったのでしょうか。

全体的なバランスだと思います。編集委員の多様性、各種規定が国際基準に準拠していること、運営ポリシーが明確であることなどが挙げられます。また、編集委員や著者から投稿された論文のインパ

**【折田】** プレッシャーを感じなかったといえば嘘になると思います。特に、学会から切望されていたJIFが本当に自分の舵取りで取れるのかなとは、正直思いましたね。実際に始めてみると一緒に悩み、歩んでくださる委員の先生方の力強いサポートがあり、さらに杏林舎さんのアシスト力がとても大きくて、取りあえず雑誌としての基盤やその投稿システムの起ち上げなど土俵作りを親身になって頂きながら着々と進めていけました。そういった意味では、深刻な心細さや大きな不安はありませんでした。取りあえず今、目の前にある課題を確実に解決しながら準備を進めていく、という感じでした。

創刊からこれまでにSSRRでは2つ大きな関門があったと思います。まず1つ目は、2018年に創刊2年目の段階でPMCの

クトも大きく影響しています。実際に編集委員の先生方は皆さんハイ・インパクト論文を出版されていますし、創刊当時から著者の先生方もハイ・インパクトな論文を投稿していただいています。SSRRはあらゆる審査基準にしっかりと沿って運営されていることが評価されたのだと思います。

### 2. 創刊からの振り返り

2016年の創刊準備開始から7年でJIF取得と、とても早いペースで進んでくれました。創刊準備に向けたキックオフ編

審査を通過してPubMedに掲載されたことです。その影響として、PMC掲載の翌年に、投稿数が2倍に増加しました。それまで年間100投稿前後だったのが一気に200投稿を超えたのですが(図1)、これについて先生方が感じたものはありましたか。

**【折田】** PubMedにSSRRが掲載され、世界の研究者から検索されるようになった、ということで、SSRRへの投稿を勧めやすくなりました。これは気が楽になりました。「PubMedに載ったから、近々JIFを取るよ」と言いやすくなりました。あとはDOAJ (Directory of Open Access Journals) やESCIなど、他のデータベースにも掲載されるにつれて投稿数が増え、気持ちいいほど顕著に効果が表れているなどあらためて感じました。

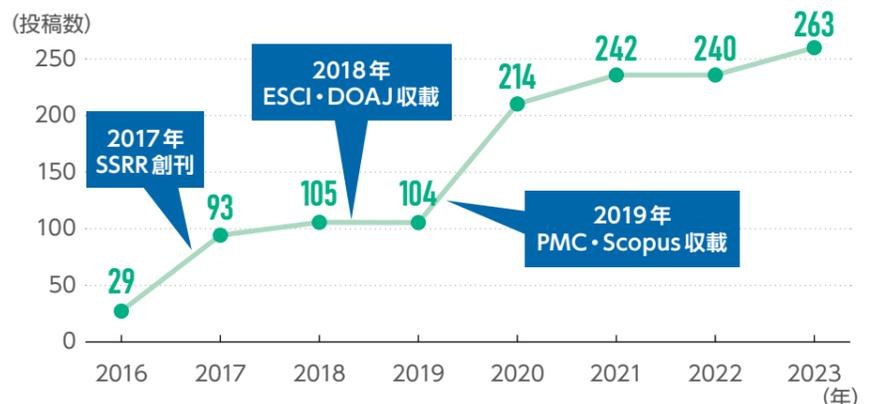


図1. SSRR創刊からの投稿数の推移  
各種国際データベース(ESCI、DOAJ、PMC、Scopus)掲載ののち、2020年の投稿数が2倍に増加した。

一般社団法人 日本脊椎脊髄病学会【英文誌】  
Spine Surgery and Related Research,  
Deputy Editor-in-Chief

折田 純久先生

- 千葉大学フロンティア工学センター 教授
- 千葉大学大学院融合理工学府 基幹工学専攻工学コース 教授
- 千葉大学大学院医学研究院整形外科 脊椎脊髄外科

PubMed掲載およびJIFの付与によって、学会員の先生方が投稿先としてSSRRを選ぶことに対して大きな変化はありましたでしょうか。

【折田】創刊した頃の頃と比べると著者の先生方の投稿先の候補としてSSRRが自然に出てくるようになりました。最近では、積極的に投稿を勧めなくても著者の先生方からSSRRに出します、と仰っていただくことも良くあります。創刊から7年が経過し、臨床・基礎含めて最もアクティブに論文を執筆する世代が当たり前の投稿先としてSSRRを捉えてくれるようになり、我々としてもうれしい限りです。

### 3. 投稿数促進対策

創刊当初、海外の著名なジャーナルに投稿されている先生方をSSRRに振り向け、投稿してもらうために、具体的にはどのような活動をされたのでしょうか。

【折田】普段から懇意にさせていただいている先生方に、SSRRに投稿してください、とお願いするところから始めました。なりふり構わずお願いし、もはや土下座に近かったですね(笑)。Review Articleの場合は、委員会でテーマをあらかじめ選定して、そのテーマにおける世界的に著名な先生方に執筆を依頼しました。特にJSSRの先生方は大変好意的かつ協力的

で、SSRRの黎明期を支えていただいたことに大変感謝しています。また、編集委員の先生方もそれぞれのツテをたどって、国内外の色々な先生方に執筆をお願いしたことで、幅広い領域の先生に多くのReview Articleを書いていただきました。海外の研究者に対しては委員の先生方が様々な学会や研究会など色々な機会が個人的に投稿を依頼したり、SSRRについて啓発していただいたりしていただきました。当初は、色々なメジャージャーナルの掲載著者に一斉にCall for Paperを送信しようという予定があったのですが、ちょうどEUのGDPR(General Data Protection Regulation)が施行されるタイミングと重なったので大々的なプロモーションは取りにくくなりました。しかし、幸運にもそのタイミングでPMCに掲載されたため、必然的に世界的にアピールすることができたのは大きかったと思います。PMCを通じてPubMedで検索されるようになったことにより、自動的に海外のオーサーに対するジャーナルの露出が増えて認知されるようになったと思うので、やはりPMCは第一ステップとしては非常に大きな意義があったことは間違いありません(図2)。最初の頃はインドやトルコなどの地域からの投稿が多かったのですが、PubMed検索を通じてより広い世界の研究者の目にとまり、今では米国やヨーロッパ、中国なども含め各国からの投稿が増加しており、非常に国際性が高くなってきていると感じます。

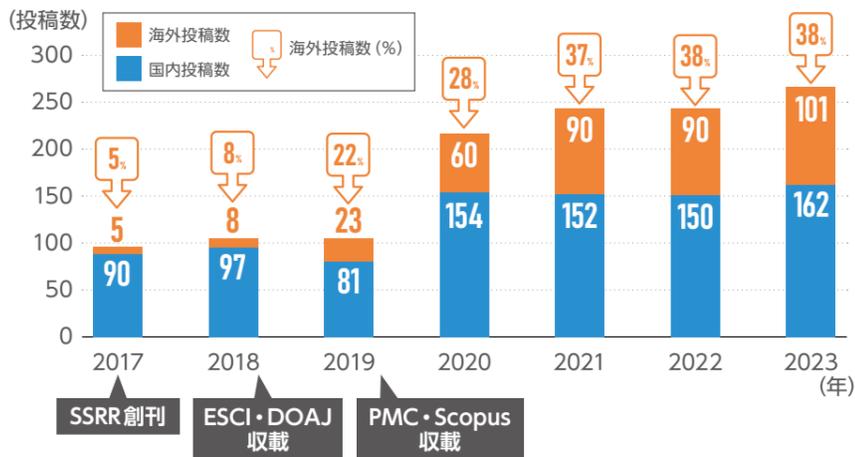


図2. 海外の投稿数の推移

国内投稿数(青)に対する海外の投稿数(オレンジ)。各種DB掲載の影響が海外著者からの投稿増加にも影響している。

投稿に関するデータを見てもPubMed掲載とJIF取得による影響は、国のバリエーションに顕著に表れていますね。

### 4. 杏林舎との協力体制

【折田】とはいえ、JIFまで取れていて順調なのは、杏林舎さんの力も大きいと思います。最初の頃は本当にJIFが取れるのか、われわれもどうやって取っていいのかわからないし、我々だけでは集めることのできないような色々な情報を常に仕入れて、こうするのいいと思います、こうしましょうと導いてくださったことに対して、本当に感謝しています。

ありがとうございます。まだまだやることはあると思いますが、SSRRのJIF取得は弊社にとってもすごくうれしいことで、歓喜にあふれるニュースでした。

【折田】職場に歓喜の報告電話までいただきましたね(笑)。

これは絶対にすぐ報告しなければ!と思ひ電話させていただきました。

【折田】これは杏林舎さんにとって、日本企業の国内におけるプレゼンスを高めるという意味で、すごく大きな出来事ではないでしょうか。これから英文誌を立ち上げようという先生方からお問い合わせをいただいた際、外資系の出版社と杏林舎さんを比べたときに何となく最初は海外のほうにプライオリティーを置いている感じでしたが、われわれが杏林舎さんにやってもらったことや一緒に仕事をしてきたことについて、お話しすると「実は杏林舎のほうがいいのかも」というお考えに至った話も聞いています。そういう意味では、こういう事例があるというのはいいのかなど。

日本の企業として、とても励みになるお言葉ありがとうございます。

### 5. これからの発展へのアイデア

今後のSSRRにおける成長戦略として試してみたいアイデアはありますか。

【折田】よりアピール度を高めるために、何をするかです。前から話が出ていた特集号の設定があります。今の時代、ジャーナルとして見るよりも論文単位でインパクトを計ることが多いと思うので、掲載論文そのものの質を上げるのが大切なのかなと思います。特にオンラインジャーナルは、かつてのように図書室に紙の冊子がおいてあって、ふとパラパラとページをめくって眺めるような発行媒体ではないので、ガチガチの特集号の設定というよりはインパクトの高い特集記事の掲載を企画し、掲載号にとらわれず掲載する形かなと思います。それと、現状では掲載率は35%くらいですので、これを20%、10%と段階的に下げている、「あのSSRRに載ったよ!」というように格を上げられると、自然と雑誌の存在感というのは上がっていくのかなと思います。あとはChatGPTをはじめ、大規模言語モデルで文献検索をし、まとめていくような時代にこれからはなっていくと思います。現状では一定の時期までの情報しか蓄積できないChatGPTも、今後バージョンが上がって最新のデータも参照するようになった場合、Chatbotが効率的に必要な情報やデータを収集でき、探している内容に対して的確な選択ができるような時代になるのか、と漠然と思っているところもあります。従来の我々の世代では考えられないような論文執筆のアプローチが…Webに続く

続きはWebで

誌面の都合上、掲載しきれなかったインタビューの続き(全文)をWebにて公開しています。APCや今後の展望など、ジャーナル運営のヒントになる情報満載です!ぜひ以下より続きをお読みください。

杏林舎

<https://www.kyorin.co.jp/>

### 編集後記

今回も、前号で大好評をいただきましたJournal Impact Factorを昨年に取得されたジャーナルについて、インタビュー記事でご紹介しました。

今号は、日本脊椎脊髄病学会様が発行する英文誌「Spine Surgery and Related Research」(SSRR)の編集責任者として創刊当初より携わられてきた折田純久先生へのインタビューでした。

脊椎脊髄分野に特化したジャーナルとして創刊され、創刊時ならではの様々なご苦労があらながらも、順調なペースで主要な学術データベースに掲載されていき、PubMedに掲載されたことで投稿数が一気に増えたのは驚異的な出来事でした。

工学分野でもエキスパートでいらっしゃる折田先生は生成AIなど先端技術の発展についてもご自身の見解をお持ちですが、何よりも読者の目線に立って、SSRRのジャーナルとしてあるべき将来を明確に描かれている点が非常に印象的でした。

本紙面に収められなかった続きを弊社Webサイトに掲載しておりますので、是非そちらもご覧ください。

## S1M NEWS

2024年4月10日発行 第25号

発行 株式会社 杏林舎  
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10  
Tel.03-3910-4311 Fax.03-3949-0230  
<https://www.kyorin.co.jp/>

編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎  
E-mail s1-support@kyorin.co.jp

## KaLibEL eラーニングシステム KaLibEL(カリベル)の機能紹介

第2回

専門医等の資格認定業務に最適な医学系学会向け eラーニングシステム「KaLibEL(カリベル)」について、第2回となる今回も引き続きオススメ機能をご紹介します。

### 決済の自動消込機能を搭載

KaLibELでは、受講料の決済方法として「クレジットカード」と「銀行振込」の選択が可能です。クレジットカード決済やPayPay銀行への銀行振込をご選択いただくと、システム上で自動消込機能がご利用になれます。この機能では、ご担当者様が入金確認処理を行うことなくユーザーは即座に受講が可能になります。ご希望に応じて、クレジットカードによる自動決済と銀行振込の手動決済確認を併用もご利用になれます。また、決済状況は管理画面にていつでもリアルタイムに確認することができます。

KaLibELは、各種情報の一元管理と管理画面の充実した機能により、安心かつ円滑なeラーニング運営を可能にします。「eラーニングを始めたいがよくわからない」「担当者やユーザーの負担を少なくeラーニングを運用したい」といったご要望には、しっかりとヒアリングした上でシステムを構築いたします。ご興味を持たれましたら、弊社担当までお気軽にご連絡ください。(kalibel\_pr@kyorin.co.jp)